1

(Nov 16 2019)

知的障害者のセクシュアリティと地域生活：支援観点からの検討

筑波大学大学院人間総合科学研究科

名川　勝

nagawa.masaru.gf@u.tsukuba.ac.jp

2

七生養護学校事件

想定される背景

・性と性教育に対する否定的態度（社会規範、道徳観）

・障害者に対する消極的な社会役割論

 -障害者に対するあらかじめ与えられた役割期待

 -それを越え積極的かつ自由に為される行動に違和感を覚える→社会的制裁につながる

・（知的）障害者に対する保護的支援観、パターナリズム

 - 寝た子を起こすな／“リスク”への忌避感 ...性と性教育は“リスク”か？

 -「消費（お金）」「結婚と子育て」 「自立」も同様

3

性の権利宣言（Declaration of Sexual Rights)(1999）

(第14回世界性科学学会総会)

1. 性的自由への権利

2. 性の自己決定権、性の健全性（インテグリティ）及び性的身体の安全性への権利

3. 性的プライバシーへの権利

4. 性の平等への権利

5. 性の喜びへの権利

6. 情緒的な性的表現への権利

7. 自由な性的関係への権利

8. 自由かつ責任ある生殖に関する選択の権利

9. 科学的研究に基づく性的情報への権利

10. 包括的なセクシュアリティ教育への権利

11. 性の健康に関するケアへの権利

4

知的障害者の性に関する研究動向（武子、2019）

・知的障害者の性の研究は大きく5分野とされる

 - 対処を要したり、問題とされる性行動

 - 恋愛に関する当事者のニーズと、それに対する支援者の思い

 - 結婚、出産、子育てなどライフイベントにおける必要な支援

 - 当事者の性知識

 - 買春被害

・その対応や考え方に大きな進展があるとは言い難い、十年一日

・性知識研究分野を除く4分野では、「支援者」の関与が共通の課題となっている

 - プライバシーと介入可能性、問題行動vs発達課題、支援者の性理解、ライフイベントに対する支援のあり方、ほか

5

残された課題（武子、2019）

知的障害者の性に関する研究において未だ十分ではない課題として、武子が挙げる課題

・理論研究の不在

・社会規範に適応できないとされる、いわゆる問題行動に対する支援

・知的障害者の性行動の意味を正しく理解するためのアセスメント方法の開発

 - ニーズの評価を含む

・性教育プログラムの開発

・LGBT研究の不在（日本のみ）

6

知的障害者の子育てとその支援

・セクシュアリティを巡る課題としては、結婚と同じく、ライフイベントに分類される。

・例えば英国では70年代から研究的にも支援としても取り組まれており、結婚時から子育てに対する前向きな取り組みが始まり、また子どもの成長に合わせた課題への支援も行われる。豪州も同様。

・どの国でも統計的な把握は困難だが、一定の取組がある（英国は障害者白書でもページが割かれている）。日本では実態把握も十分ではない。

・日本では子育ての課題は、「支援者が責任を引き取るかどうか」に左右される。親は子育て“能力”を疑問視され、“危ない”として否定される。

・知的障害がある親のネグレクトに起因する事件などは、親の問題に帰責される。しかし、その親が英国にいたら？と思わずにいられない。

 - 堺市の事件（大阪地裁2009年8月実刑判決）→ 2009年7月13日 東京新聞朝刊参照

7

意思決定の支援の層

＜図表＞

8

何が意思決定の支援を阻んでいるか？

＜図表＞

9

意思決定支援の課題と、その対応方略

＜図表＞

10

リスク事案に関する安全性と幸福の二次元による対応説

＜図表＞

11

Positive Risk Taking

・Risk Enablement, Taking Risks Positively などの言い方もある

・英国の認知症ケアの文脈で、リスクのマネジメントと評価の中から展開した。

 - NHSほか報告書が2010年前後

 - 多くの研修プログラムが行われている ； 近年では豪州でも

・リスク観点による本人意思と可能性の単純な否定から、positive riskの評価に基づく本人意思の支援手続き明確化に移行

・まだ日本では劇薬扱いか。

 - 日本ではdignity of risk （リスクの尊厳）という言葉も未だ敷衍されていない

12

リスクの定義

リスク（risk）：目的に対する不確かさの影響(effect of uncertainty on objectives)

≫注記 1 影響とは，期待されていることから，好ましい方向及び／又は好ましくない方向にかい（乖）離することをいう。

≫注記 2 目的は，例えば，財務，安全衛生，環境に関する到達目標など，異なった側面があり，戦略，組織全体，プロジェクト，製品，プロセスなど，異なったレベルで設定されることがある。

≫注記 3 リスクは，起こり得る事象（2.17），結果（2.18）又はこれらの組合せについて述べることによって，その特徴を記述することが多い。

≫注記 4 リスクは，ある事象（周辺状況の変化を含む。）の結果とその発生の起こりやすさ（2.19）との組合せとして表現されることが多い。

≫注記 5 不確かさとは，事象，その結果又はその起こりやすさに関する，情報，理解又は知識が，たとえ部分的にでも欠落している状態をいう。

※ JIS Q 31000：2010 (ISO 31000：2009）

13

リスクの影響には positive と negative がある

旅行に行きたい

→positive riskリスクは、何かすれば生じる。

・おいしいものが食べられるかも

・新しい出会いがあるかも

・うつな気分を解消できるかも

→negative risk

・食中毒に遭うかも

・お金を無駄に使うかも

・乗り継ぎに失敗して落ち込むかも

・帰れなくなって親に怒られるかも

・リスクは、何かすれば生じる。

・そして、何もしなくても生じる。

14

Enabling Risk

15

positive risk taking (risk enablement)の 4要素

・Putting Positive First：ポジティブリスクを把握し、これに応じた働きかけをする

・Being Proactive：事前的に（創造的に）対応する

・Staying True to Preferences：本人の選好に誠実である／遊離しない
　　　　　　　　　　　　※『真に受ける』（島村、2015）

・Minimising Harm：実践により生じるであろう弊害（harm）を最小化する

Bigby, Douglas and Vassallo (2018)

＜右側に図＞

16

dating の“リスク”への対応（演習事例）